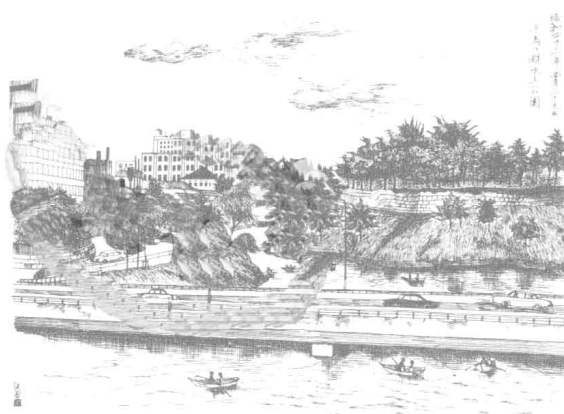


東京文学画帖

小針美男



千鳥ヶ淵水上公園

創林社

東京文学画帖

一九七八年一〇月二〇日第一刷発行
一九七九年二月二八日第二刷発行

定価一六〇〇円

著者 小 針 美 男

発行者 宮 西 忠 正

発行所 (株)創 林 社

東京都千代田区三崎町二の二二の二

電話東京二六五―八〇七七 千101

印刷・大一企画 製本・文信社

目

次

序詩 五

不忍池 六

三四郎池 八

根津の街角 一〇

無縁坂 一二

無縁坂上の家 一四

本郷三階建の下宿屋 一六

本郷菊坂 一八

本郷菊坂裏の路地 二〇

湯島天神 二二

団子坂 二四

小石川蝸牛庵際の大榎 二六

田安門 二八

お茶の水界限 三〇

神田駅界限 三二

上野スター座の路地 三四

鍵屋 三六

日本堤の桜肉屋 四〇

吉原見返り柳 四二

今戸橋暮景 四四

花屋敷 四六

常盤座 四八

木馬館 五〇

お好み焼屋・染太郎 五二

駒形どじょう 五四

柳橋 五六

吾妻橋 五八

水上バス 六〇

鳩の町 六二

玉の井駅 六六

玉の井遊郭跡 六八

町の映画館（玉の井文映） 七〇

曳舟川 七二

向島蝸牛庵跡 七四

百花園 七六

四ツ木橋 七八

柴又の帝釈天様 八〇

矢切の渡し 八二

水元小合溜井（釣仙境） 八四

千住・骨つぎ・名倉 八六

千住の旧道（奥州・日光街道） 八八

愛宕山 一三二

千住柳町・遊郭跡 九〇

新橋際水上バス発着所 一三四

南千住の延命地藏尊 九二

西銀座 一三六

田端大橋 九四

銀座 一三八

王子駅と飛鳥山 九六

日本銀行 一四〇

新河岸川 九八

京橋 一四二

池袋地下道入口 一〇〇

水天宮界限 一四四

早稲田大学 一〇二

末広亭 一四六

新宿 一〇四

新富町 一四八

三鷹駅際・玉川上水 一〇八

佃の渡し 一五〇

世田谷城趾 一二〇

佃の渡し（船室の内部） 一五二

渋谷・稲荷小路入口 一二二

佃島 一五四

渋谷百軒店（テアトルSS隣の路地） 一二四

永代橋 一五六

恋文横丁 一二六

両国橋 一五八

行人坂 一二〇

東京都慰霊堂 一六〇

蒲田駅西口 一二二

深川不動尊 一六二

ハツ山橋 一二四

木場 一六四

慶応義塾大学図書館 一二六

洲崎遊郭跡 一六六

青山通り 一二八

浦安 一六八

増上寺山門 一三〇

付・メニューその他 一七二

あとがき 一七六

この広い東京の空の下には
無数の人間と建物がひしめいて
雑然とした不調和音を奏でている

混乱と狂騒を飲みこんで

飽満した都会は

茫漠とした貌を晒しているが

その片隅には

人の心に忍び寄るメランコリーな詩情と

ペーソスが沈潜している

東京は人間の織りなす

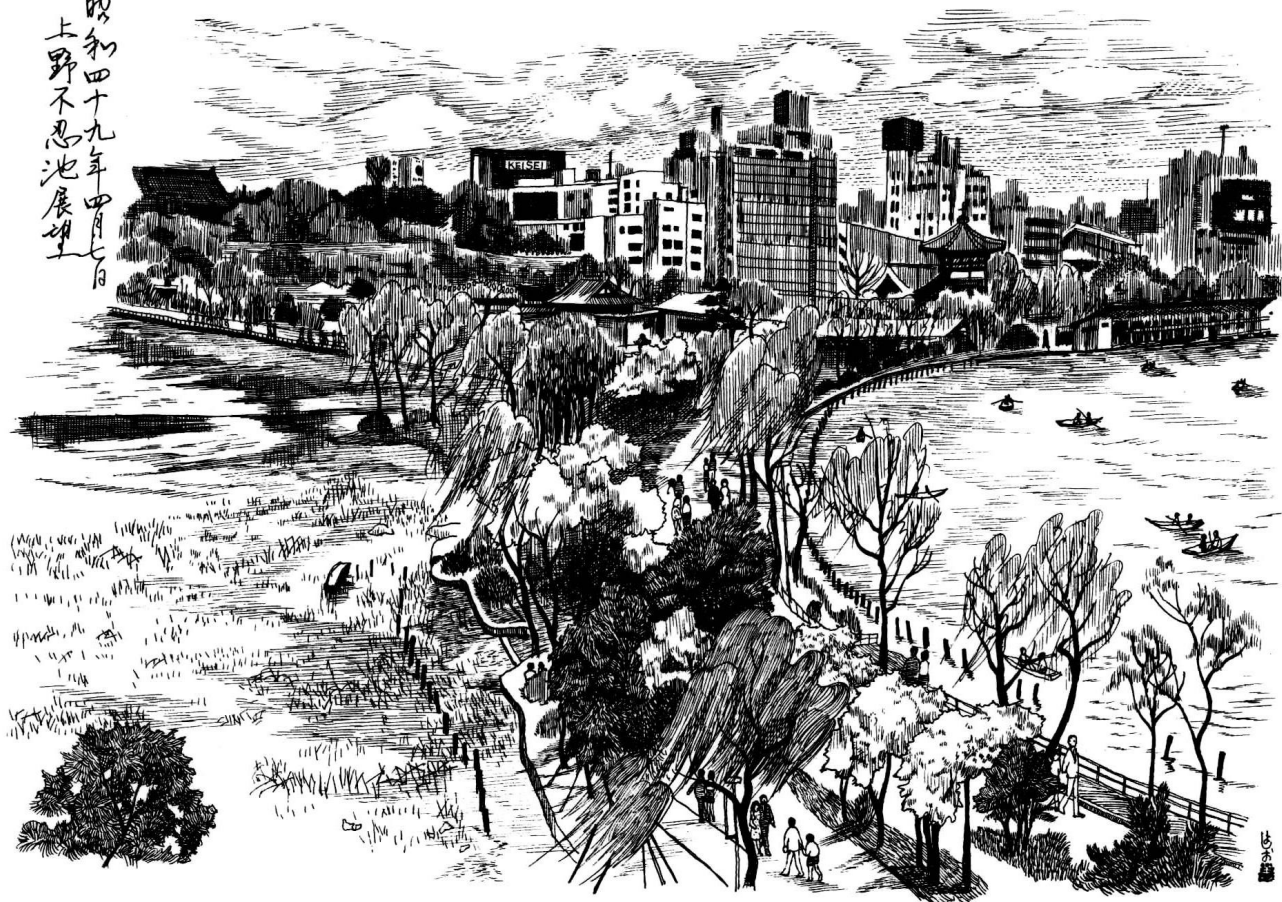
哀歎の糸車だ

昭和三十八年の一月半ば、絵描き仲間の水谷清照氏から今夕六時から上野韻松亭で大調和展の懇親会があるから一緒に行きませんか、という電話が入った。他に用事もなかったので早速いいでしょう、ということになり、上野駅北口で落ち合った。その日は四時頃から小雪が降り出し、すこぶる寒い日であった。二人共鼻の頭を真赤にしながら会場の韻松亭に入った。丁度十年程前に出版美術家連盟の新年会が、やはりこの韻松亭二階で行われたことを思い出し、その古びた階段を一步一步踏みしめるように二階に上った。のらくろの田河水泡先生や、挿絵画家の第一人者岩田専太郎先生にお目にかかったのもこの二階だったな、と懐かしい思いに打たれながら会場に入ったが、すでに宴たけなわで鍵の手なりの部屋は湧き立つようであった。おくれてきたためか空席とてなく水谷氏と部屋の入口に佇んでまごまごしていると、部屋の隅から声がかかり、どうぞこちらへと会員の一人に案内された。何と、そのたった一つの空席というのは大調和展の会長であり、又、文名高い武者小路実篤先生のまん前であった。そこは勿論空席ではなく、武者小路先生の前をあけてあっただけのことで、図らずも私達二人は先生とお見合いの形になり、一メートルも距てぬところで、その尊顔を仰ぐことになった。隣に坐った水谷画伯も頬を赤らめ、いささか興奮気味の態であった。その上、武者小路先生は傍を通りかかった女中さんに、私達のために盃がないので持つてくるようにと事細かに気を配られ、再三にわたって督促をするなど温かい心遣いをされた。さすがに人品卑しからず、構えずして風格を備えておられた。私はただただ恐縮するのみで、気持ちも上の空で盃を口に運んだ。

その夜、懇親会が終った後、先輩の絵描きや水谷画伯等五人程で連れ立ち山を下った。もう雪は止んでいたが、眼下の不忍池は真暗で何も見えなかった。しかし心の高ぶりのためか返って雪に被われた弁天堂などが美しく目に見えるように思われた。

池 忍 不

昭和四十九年四月七日
上野不忍池展望



播鉢^{はち}の底のような池畔に立つてスケッチブックを開いていると、対岸の繁みの間にある石段を下りてきた若いアベックが目に入った。女性の着ている淡い色調の和服が四囲の緑に映えて浮き上るように美しかった。当然のことのように私は、漱石の「三四郎」に出てくる美弥子と三四郎の出合いを思い浮かべた。

「そう。実は生^なっていないの」と云いながら、仰向いた顔を元へ戻す、その拍子に三四郎を一目見た。三四郎は慥^{しんじ}に女の黒眼の動く刹那を意識した。その時色彩の感じは悉く消えて、何とも云えぬ或物に出逢った。その或物は汽車の女に「あなたは度胸のない方ですね」と云われた時の感じと何処か似通っている。三四郎は恐ろしくなった。

漱石という作家の恐ろしいような描写力である。この小説が発表されたのは明治四十一年だから、すでに七十年前になる。特に関東大震災以後は、それ以前と大部変ったといわれるが、ほぼ当時のままの姿を伝えているのではないかと思える。

池はそれ程静かな自然のままの佇まいをみせ、暗緑色に深く沈潜した水の色に四囲の厚い森の茂みを投影させている。そんな水の色を分けて、真白な白鳥が二、三羽滑るように泳いでいる。

先程向う岸にいた若い二人連れも、何時の間にかいなくなっていた。私はスケッチを了えて背筋を伸ばし、顔を上げると、森の樹々の上に講堂の赤茶けた煉瓦の時計台が、森の緑と対比よく聳えていた。私はもう一度、池を観察してから崖を上った。

この絵を書いたのは昭和三十四年のことである。それから後、一度も三四郎池へ行ったことがない。その間に安田講堂を中心に、学生と機動隊の攻防戦があったりして、学生の気質もまるで変わってきているようだ。池を取り巻く人間の心の変化につれて、池の佇まいまで変化しなければと、秘かに愁えている。

池 三四郎



昭和二十四年九月二十日
 文部省 東京大学構内
 三四郎池

根津に住んでいる版画家の本間吉朗氏に電話した。本間さんは過去何回となく銀座の画廊で個展を開いている。決して流行画家というのではないが、自分の個性を大切にして、こつこつと勉強している。文学にも造詣が深く、読書もお好きなようだ。その本間さんに根津界限のことについて、いろいろおたずねしたところ、最近、松本清張の「文豪」という本を読んだが、明治時代にまだ根津の八重垣町や宮永町の一部にかけて遊郭があった頃、学生時代の坪内逍遙がよく通っているうちに、あるお女郎さんとねんごろになり、とうとう押しかけのような形で逍遙夫人になったが、そのことを逍遙はつとめてかくしていた、という話から滝井孝作の「無限抱擁」の中に本間さんと同じ名前の吉郎という人が出てくるが、その吉朗さんも根津に住んでいる文学青年なんですよ、というような話までなされて笑われた。それから銅版画家で、近年文学の方でもその才能を発揮して芥川賞を受賞した池田満寿夫もまだ無名であった頃、根津の近辺に住んでいたようだし、絵描きなんかもかなり根津にいるようですよ、それに怪談ものとか落語にも根津はよく出てくるんですよ、と根津を語ることが大変楽しそうであった。

私は電話を切ると、書棚から滝井孝作の「無限抱擁」を取り出してぱらぱらと頁を繰ってみた。昔読んだ記憶がほのかによみがえってきた。主人公信一とお女郎松子との恋愛が、滝井孝作独特の淡々とした文体で書かれた小説である。この絵はその小説の中で、

「——根津須賀町□□番地ですわ、お寄り下さい」と松子が云うた。「表札もお前さんの名?」「えエ」と頬笑んだ。

とある須賀町（現根津二丁目）の街角である。大正時代からある、古い民家が「無限抱擁」の時代そのままの姿でそこにあった。もうすっかり老朽して、屋根にはべんべん草さえ生えていて、小説の背景である風景も遠からず消え去ってしまうことを思い、心淋しい気持ちに打たれた。

根津の街角

昭和十三年
六月三十日
根津二丁目
旧須賀町角



上野不忍池西畔、茅町の交番横から本郷の台地へ上る坂が無縁坂である。左側はもと岩崎邸の石塀が坂上に伸び、鬱蒼とした樹木が空をかくし、蔓草が塀の外側にはい廻って、一層古びた趣を呈している。森鷗外の「雁」によると、

その頃から無縁坂の南側は岩崎の邸であったが、まだ今のような魏々たる土塀で囲ってはなかった。きたない石垣が築いてあって、苔蒸した石と石との間から、齒朶や杉葉が覗いていた。

とある。当時はこの坂も道幅がずっと狭く陰気な坂で、後年拡張されたものだという。「雁」は鷗外が学生時代の明治十五年前後の記憶をもとに書かれたものと思われるが、現在では、坂上に残る明治時代の民家などに、当時の面影を僅かに残すのみである。

かつては、この坂を幾度となく上り下りしたのであろう若き日の鷗外を想い、あるいは作中人物の岡田青年や、紺縮の単物に、黒繻子と茶献上との腹合せの帯を締め、織い左の手に手拭やら石鹼箱やら糠袋やら海綿やらを細かに編んだ竹の籠に入れたのを解るげに持っているお玉さんとか、手鞆を片手に金縁眼鏡をさらさらさせながら、せかせかと坂の中程にあるお玉さんの家へ通っていく金貸しの末造の姿を想像しながら、スケッチブックの手を走らせた。そんな想像をかきたてつつ鉛筆を走らせると、興味は次から次へと湧き出て、あきることを知らない私でもある。更には豊田四郎監督で映画化された時の、お玉に扮した高峰秀子の、一寸愁いをおびて、愛らしい明治の女を、本能的な欲望で凝り固まったような東野英治郎の金貸し末造を、理智的で清潔な芥川比呂志の岡田青年などを二重写しに脳裏に描いてみたりした。

無 縁 坂



文学好きの友人と久し振りに天神下のうまい魚を食べさせる小料理屋で会った。その店の裏手には湯島天神があったり、その一寸先には無縁坂や三四郎池もあり、明治文学でお馴染みの土地である。

友人は手酌でちびりちびりと盃の酒を舐めるようにしては、喋る方がいそがしそうだった。その友人というのは漱石が好きで、話がたまたま無縁坂の話から鷗外のことになり、私が鷗外の文章は一句読点取ってしまっても、一字でも他の文字とさしかえても駄目になる完璧な文章で実に素晴らしい、といったらその友人は途端に不愉快な顔をした。「君は下町育ちのくせに漱石より鷗外の方が好きだなんて。鷗外の軍服を着て髭をはやした厳めしい格好をしろよ」と、いかにも無念遣る方ない、という顔になった。

友人は同人雑誌の世話役などもやっているらしく、もう亡くなったが、ある高名な作家のところへもよく出入りしていたようで、「特に昔の作家というのは世に出るまでは食うや食わずの生活をして、辛酸をなめつくしているから銭に細かくて、飲みに誘ったってなかなか来ないし、つきあいづらいよ。それに引きかえて絵描きの方は意外とつき合いのいいのが多いよ」といった。「絵描きの方がお人好きが多いのかね」と聞いたら「そうときまつたわけではないがね」と今度は暖味な返事をした。「時雨音羽なんて詩人は、昔うれないう頃、便所へ行く紙がないので、障子の紙を引き裂いていったそうだよ」というと、友人は「そうさ、詩人とか作家なんてのは、それ以外に何も出来ない人がやることで、読む方に廻って良かったとか、つまらなかったとかいっての方がいいのさ」といった。

無縁坂上の家